

町の変貌を追って

町並み通信

Website『大和八木通信』を通してひとつの町の変貌をリアルタイムに追っています。大和八木は、奈良盆地の南部を十字に横切る古道（横大路と下ツ道）が交差する界隈に中世から栄えた「町場」で、近世には伊勢参りの人々でにぎわった「宿場町」でもあります。

藤原京条坊の北西に位置したために「条理制」、そして中世には「環濠集落」として発達したためにその双方の町割りの特徴を持ち、近代には鉄道や産業道路を町に迎えてきましたが、高度成長期の街区整備の波を受けなかった（計画道路未遂）ために無事に今も古い町並みをのこしている、そんな町です。



現在の八木札の辻



西国三十三所名所図会(嘉永6年)より『八木札街』

思い出すと、小さいころは古めかしい屋敷の間を縫うように走る「路地」が絶好の遊び場でした。ぐいち（くい違い）をなす路地での鬼ごっこや缶蹴りはとてもスリリングでしたし、長細い町家の通り庭（家屋内を貫通する土間）までもが子供特権の公道となっていました。町内のそうした小路は子供らの頭の中に完全にマッピングされ、友人宅までの最短距離は当然のこと、どこにどんな恐いおじさんが生息しているか、そこではどこまでの遊びが許されるかも熟知していたものです。

無策に救われる

現在、八木の隣町の今井は中世の姿そのままを目指して町並み整備が長年続けられ、全国有数の完成度の高い重要伝統的建造物群保存地区になっています。

いっぽう大和八木では、町を貫く街道を拡幅し古い町並みを一掃する計画があったほどですから、歴史的な町として何の価値付けもされないまま、時代の進むままに変化をしてきました。

街道に面した大屋敷の敷地は50mプールがすっぽりはいるほどに奥行きが長く、のちの開発で敷地の周囲が小規模宅地で埋まってきてしまうと、乾いた地面に降る雨浸みのように接道なく取り残される土地が広がってきているのです。

消防車も救急車も入らない、介護サービスの送迎車も横付けできない、そんな町割りにはもはや「まち田舎」のようです。人口の少ない街区内では、当然ながら歩車は混在しており、安全に行き来できる道も、また高齢者が徒歩で通えるコンビニさえなりたちません。日中は人影もまばらで、緊急事態に助けを求める叫び声もとどきません。

多くの古い町場で構造的におきているように、人口減は、町の再整備へのエネルギーも知恵も奪い、放置された路地奥には生活不便はもちろん防災上の危険をも増幅させてきてしまいました。

空き家バンク

そんな町大和八木に、最近ふたつの出来事が同時に起きています。ひとつは空き家バンクの成果による町家再生と古い青写真による道路整備のスタートです。

この町を訪れる誰しもが感じる町場風情に魅せられた人がひとり、ふたり・・・ある長屋には設計事務所が、ある長屋には家具作家が、はたまた複数の大学チームによる食育の場が町家再生の例です。



町家でのアート展示と細い路地

かれこれ十年近く無住のたたずまいを見せていた古い町家が、今や暖かい人の声が通りに聞こえるようなアットホームな店になっています。学業成果を地域に活かそうとの試みに、当初周囲の眼

随想 町の変貌を追って

はいぶかしげでありましたが、やがてそれも当たり前前の風景になり、見守るまでになりました。

また生涯そこで商売してしたおやじさんの思い出いっぱい町家には、今は新しい表札がかかり、近所の人たちのつなぎの場となっているケースもうれしい事例です。

民間の地道なまちづくり活動の成果はとても小さいものですが、染み入るように人と人とを時間を掛けて馴染ませていくよさがあります。

道路整備で再鼓動か？

いっぽうで始まった道路の拡幅工事には、いきなり目の前で「風景革命」がおこるので、めんくらいます。ある日、作業服の測量隊があらわれ、引き上げたかと思うや数年後、突然道路沿いの建物の解体や曳き家が始まります。



道路拡幅による曳き家工事（登録文化財の旧六十八銀行八木支店）

町の人々にとってそこは、何十年間いつ見ても精気のない家々、朽ちていくにまかせた門や塀、立地がいいのに新しい店舗も入らない、そうしたシャッター通り・廃屋通りでした。一本の線を青写真に引き、あまりに長く猶予（放置）したことは、その界限一帯に根深い「衰退」という名の菌を植え付けたのでした。

それが今、重機の音とともに界限が再鼓動し始めたのでした。計画実施までの長い、長い空白がどう埋められていくのか、日々、ウオッチ&レポートしているところです。

町並みホッパーと古文書

私は平成14年に兵庫県が始めたヘリテージマネージャー制度の四期生で、建築士の立場で地域資源を活かす活動にも励んでいるところです。

なかでも国の登録文化財制度を利用して、地域に眠る文化財の発掘、保存・活用、そしてそれら

を地域にアナウンスし、地域課題を解決する核に持っていくことも使命のひとつと考えています。

そうした活動の一環で「町並みホッパー」として各地を巡りながら、常に母港は大和八木とし、帰ってきては各地との比較をしながら大和八木の変貌を綴っています。ときには町の歴史を織り交ぜ、ときには古写真を登場させることで、地域の方々やサイト訪問者からの貴重な情報提供も増え、これを追記しています。

現在の課題は、地域文化のもうひとつの生き証人である古文書を通じて地域の魅力を発信しようとの試みです。

古文書の情報を読むと、現在の町の姿に時間軸が加わり、そこにあるものがもっとリアルに浮かび上がってくることに驚きます。

史料は江戸時代から戦後のものと幅広いので、街角をちょんまげ姿が駆けていくのが見えたり、電話もテレビもない幕末に塀の中から世界を見つめた学者の苦悶を今に重ねたりします。また戦地で命を散らせた若者がいかに家族を思っていたかを知り涙したこともありました。



古文書の山

古文書には、時代を飛びこえ、同じ空間を共有したかつての隣人からのメッセージがつまっていて、いっそう町が愛おしく思えてきます。

こうして町を読み解き、伝え、交流することで、日々更新される町の風景が、ちょっとした気遣いでその町の魅力になっていくようにと願っています。

●稲上文子（いながみふみこ）プロフィール●

和の住まい設計・稲上建築設計事務所 代表
一級建築士・ヘリテージマネージャー
1960年奈良県橿原市生まれ。京都市立芸術大学卒業後、住設デザインや数寄屋建築に携わり、2000年に独立。最近では、登録文化財の調査や古民家・町家の再生が主な仕事。どこに行っても引き手や釘隠しをチェックする和風金物マニアの町並みホッパー。
著書に『町家再生の技と知恵』（作事組編 2002 学芸出版社）、『和風金物の実際』（2013 学芸出版社）など。



卵型の舞鶴引き手